

で、刃部の両面には平絹の可能性のある布が付着していた。

京築地域では後期になると特定集団の墓地が各地に出現してくるが、副葬品で見ると北部九州の他地域と比較すると質・量ともにやや劣り、特に卓越するような首長層の墓は発見されていない。この時期、北部九州は瀬戸内海沿岸地域や畿内地域との相互の交流が非常に強くなり、当地域は瀬戸内海を介してこれらの地域の接点となっていたと考えられる。このため、当地域は独自性を発揮することなく、両者のせめぎあいの中に埋没していったものであろう。

三 道具の地域性

弥生時代に列島内の各地域で製作・使用された道具は、それぞれの地域の文化的特徴や地域間の交流などを考察する非常に有効な資料である。ここでは京築地域の土器・石器やその他の道具の変化を具体的にみていくこととする。

土器の変化 京築地域の前期の土器は、初頭から中葉の時期と地域性では北部九州に広く分布する板付式土器と共通する特徴をもつものである。当地域で最も古い前期の土器は行橋市長井遺跡や行橋市辻垣畠田・長通遺跡から出土している。前期の中葉から後葉になると京築地域ではだいに地域の個性が顕著になってくる。壺の文様に、それまでの羽状文うじょうもんに加えて綾杉文や円弧文・木葉文などが施されるようになる(図2-1

67)。特に、施文道具として、それまでのヘラ状工具以外にアカガイなどの鋸歯状の縁辺部を持つ二枚貝が多用される点が大きな特徴である。この二枚貝による施文は、山口県西部の響灘から瀬戸内海西端の周防灘沿岸地域に共通してみられる手法であり、遠賀川以西の北部九州とは別の文化圏を形成する要素となっている。

中期になると、ごく一部の地域で壺に文様を施すものが残るが、大部分は文様帯をつけない北部九州の広い文化圏のなかに包括されてしまう。特に、中葉には遠賀川以西の須玖式土器の文化圏の強い影響を受ける。ただし、甕の口縁部が「く」の字形になる古い様相は、当地域では中期の後葉まで根強く残る。

後期では、土器は西日本の広い範囲で比較的画一化されてくる。当地域でも中葉には高杯が瀬戸内海沿岸地域の影響をみせるし、後葉以後には壺や甕の底部が丸底化し始め、当地域の独自性はほとんどみられなくなる。

このように、京築地域の土器は前期後葉の一時を除くと固有の地域色をもつ時期はほとんどなく、絶えず北部九州や瀬戸内海沿岸・近畿地方などの影響を受け続けていた。別の見方をすれば、当地域は弥生時代には列島内各地との交流が非常に盛んであったということができるとであろう。

次に他地域から当地域に持ち込まれたと考えられる土器をいくつかみてみよう。

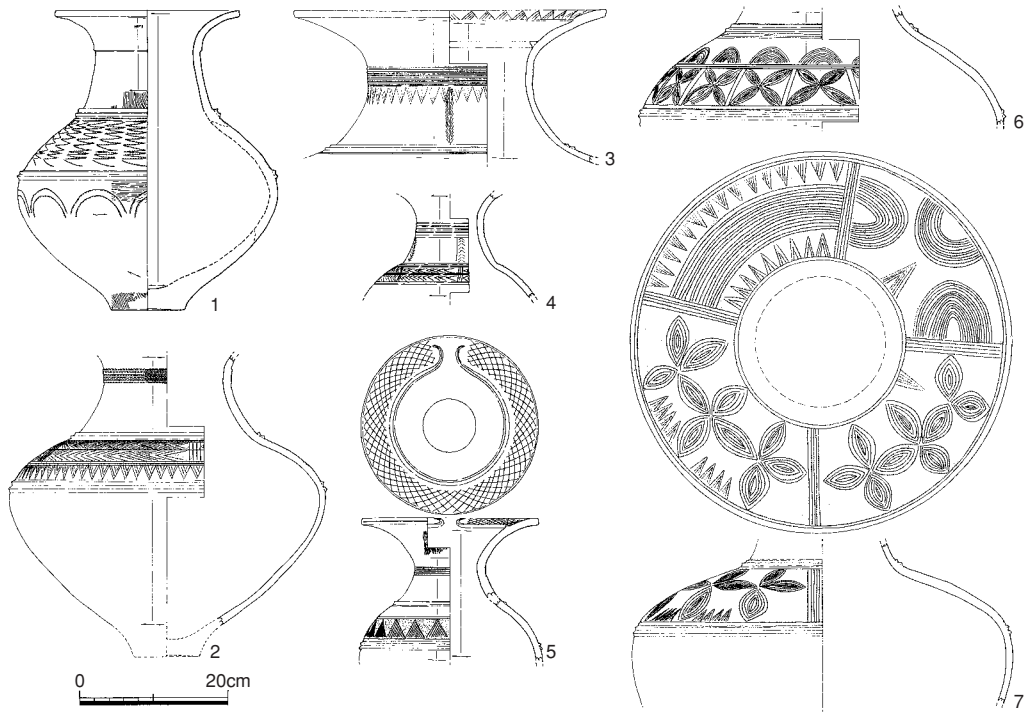


図2—67 前期の土器文様

中期のものでは下稗田遺跡のD地区109号貯蔵穴から前葉の土器とともに畿内系の壺(図2—68・2)が出土している。この壺の胴部上半には櫛歯状の工具を使用して波状文と横線文が施されていた。安武深田遺跡50号住居跡からは鉄鏃等一二〇点余りの鉄器とともに絵画土器(同・1)が発見されている。この土器は吉備地方の中器後半の壺で、肩部に五センチほどの大きさの水鳥と鹿の足を線刻している。人の移動とともに、生活環境や信仰の一端をうかがわせる資料である。

後期になると他地域から搬入された土器が非常に増えてくる。辻垣畠田・長通遺跡の大溝から出土した後期の土器のうち三九%が吉備地方などの瀬戸内系の土器であり、終末から古墳時代初頭の時期では畿内系が五〇%、瀬戸内系が四四%で、合計九四%もの土器が外来系の土器とみられている。赤幡森ヶ坪遺跡の谷状遺構からは吉備地方の系統の器台(同・7)が出土している。この器台は器高二〇・七センチの大きさで、鼓形の器形の口縁部を幅広く帯状にし、胴部の中位に横線、下位に円形の穴を穿つ特徴をもつ。他にも口縁端部に数条の凹線をめぐらす吉備の上東式の壺(同・5)もみられる。辻垣畠田遺跡でも瀬戸内系の高杯(同・6)に加えて、中九州の系統の脚がつく甕(同・4)が出土している。また、下稗田遺跡の後II10号住居跡からは後期後半の土器とともに、胴部上半に重弧文を施文した免田式の壺(同・3)が出土している。この種の土器は熊本

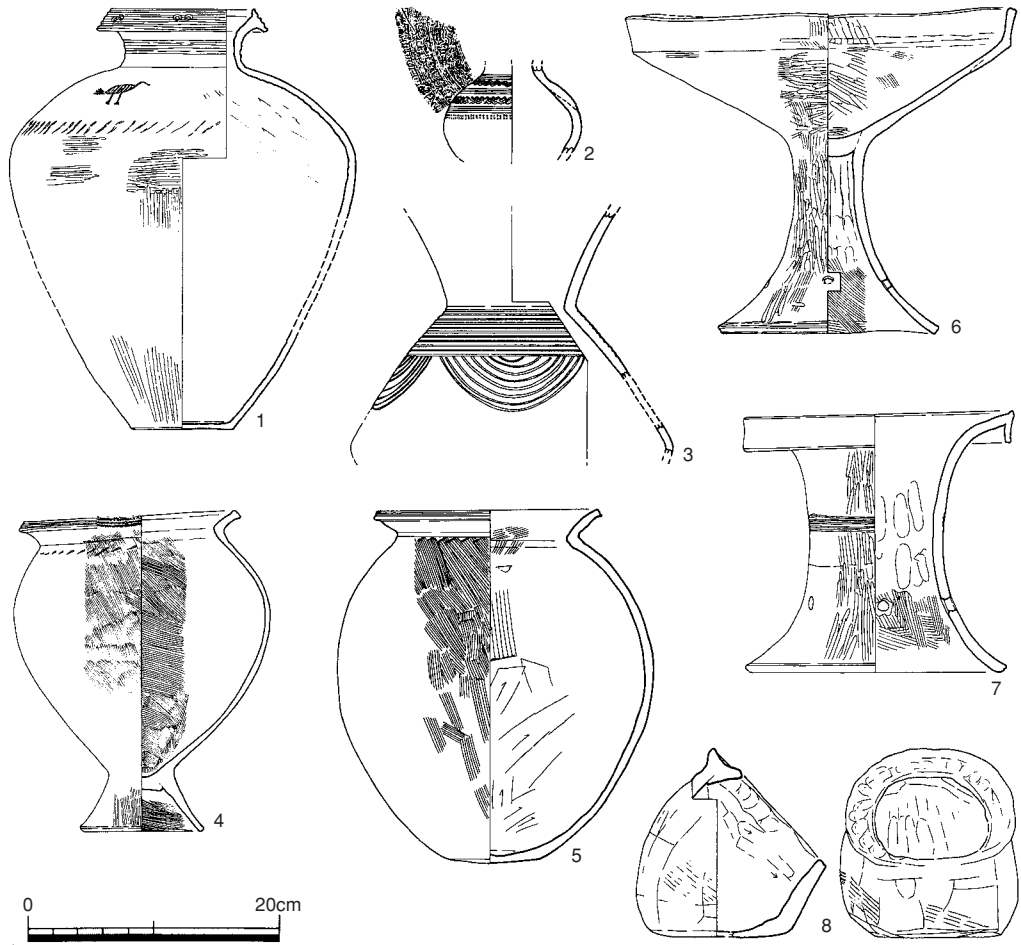


図2—68 京築地域外の系統の土器

県を中心に南九州に多く分布する土器である。更に、木ノ坪遺跡では畿内周辺に分布する手焙形土器(同・8)が後期後半の住居跡から出土している。このように地域を越えた土器の移動は後期の後半になると活発になり、古墳時代初頭には布留式と呼ばれる画一的な畿内系の土器が九州から東北地方まで一気に広がる。

当地域で発見されている土器には列島内からだけではなく、朝鮮半島の系統のものや舶載された土器そのものもみられる。長井遺跡からは擬朝鮮系無文土器と名づけられている、口縁端部を折り曲げて丸くした甕が出土している。また、後期末の時期の十双遺跡第13号住居跡からは瓦質で鉢形の楽浪系漢式土器が出土している。楽浪郡は紀元前一〇八年に前漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして朝鮮半島北部に設置した郡で、三一年に高句麗に滅ぼされるまで朝鮮半島進出の拠点となっていた。この種の土器は国内では対馬や糸島地域で数点出土しているが、当遺跡の人々が直接又は糸島地域の集団を介して入手したものと考えられ、交易圏の広さを示す資料と評価されている。

石器の変化 京築地域で古式の大陸系磨製石器が出土した遺

と地域性 跡には辻垣ヲサマル遺跡や葛川遺跡がある。葛

川遺跡の前期中葉の集落からは打製石鏃・スクレイパー・扁平

打製石器などの縄文系の石器とともに、磨製石鏃・磨製石剣・

石庖丁・磨製石鎌・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧などの多種類

の大陸系磨製石器群が出土している。磨製石斧には縄文的な扁平なものと、大陸系の大型蛤刃石斧とがみられる。また、石庖

丁は平面形が三角形に近く、全体的に厚さの変化が少ない扁平な断面をなす、古い様相を良く残すものが多い。

次に前期後葉以降の石器のなかで石庖丁と石斧の時期的変化を概観してみよう。石庖丁は全時期を通じて平面形が半月形の形態の弧の部分に刃をつける外湾刃半月形が主流となっている。前期中葉では厚さの薄いものが多いが、後葉以降にはすでに厚手になってくる。背の部分は前期には中央がわずかにふくらんでゆるやかな弧を描くものが多いが、中期には一直線になるものが増加する。後期になると大きさがやや小さくなり、孔の位置が背部に接近し、穿孔方法も回転穿孔が大多数を占める。蛤刃石斧は前期中葉には薄手でやや小型のものが多いが、後葉以降胴部の厚さが厚くなり、長さも長い大型のものが増えてくる。またこのころ形態の多様化が進んでいくが、これは石斧の用途が多角化していったことに対応した現象であろう。片刃石斧のうち柱状片刃石斧は前期では胴背部の背部（刃側）と

腹部（袂入側）が直線的で断面が方形のものが多く、中期になると背側が弧をなすとともに断面が蒲鋒形で厚手のものが増加する。

次に石器の流通について概観するが、次節で北部九州の広域的な視点での生産と流通についてふれているので、ここでは下稗田遺跡で出土した石器の地域性について紹介する。石庖丁や石剣の素材となっている赤紫色の堆積岩系の石材は従来から嘉穂盆地の立岩産として注目されているが、この堆積岩を包含する脇野重層群は嘉穂盆地から北東部にのびて北九州市西部まで分布している。このうち飯塚市立岩周辺の諸遺跡で生産された赤紫色の石庖丁や石剣などは白色不透明の砂粒を多量に含むものが多い点に特徴がある。下稗田遺跡では赤紫色の石庖丁は全体の約二七％を占めるが、立岩周辺で産出する石材のものは一〇％に満たない。これ以外の石庖丁の生産地の一つとしては北九州市馬場山周辺があげられるであろう。蛤刃石斧や石戈の一部もこの馬場山周辺で製作されたものと考えられる。また、玄武岩製の大型の太蛤刃石斧のなかには福岡市今山遺跡で生産されたものがある。特殊なものでは平面形が長方形の打製石庖丁が出土している。打製石庖丁は瀬戸内海沿岸地域で散見されるもので、石器の面からもこの地域との交流がうかがわれる資料である。なお、下稗田遺跡の石器群には未完成品がごく少ないという特徴がある。これは石器の製作工程の中でほぼ完成品に

表2—8 京築地域出土の弥生時代銅製品一覧表

市町村名	遺跡名	遺構名	資料名	時期
行橋市	前田山遺跡	I-4区9号石棺墓	「長宜子君」銘内行花文鏡	後期?
	〃	I-4区6号石蓋土壙墓	小形仿製内行花文鏡	後期?
	津留遺跡	溝5	方格規矩鏡片	後期後葉
	石並遺跡	箱式石棺	「長宜子孫」銘内行花文鏡片	後期
荏田町	稲光遺跡	II地区2号トレンチ	小形仿製素文鏡	後期終末
勝山町	上所田遺跡	石蓋土壙墓	「長宜子孫」銘内行花文鏡片	後期終末
	〃	石蓋土壙墓	三角縁鳥文鏡片	後期終末
	小長川遺跡	方形周溝墓1号主体部	斜縁鳥文鏡	後期終末
	上田遺跡	箱式石棺	前漢鏡?	
犀川町	タカデ遺跡	A区1号石棺墓	小形仿製鏡	後期後半~終末
	山鹿遺跡	石蓋土壙墓	小形仿製内行花文鏡	後期後半
	〃	2号箱式石棺	内行花文双獸鏡片	後期終末
	本庄池北遺跡	石蓋土壙墓	小形仿製内行花文鏡	後期終末?
	続命院遺跡	箱式石棺	小形仿製内行花文鏡	後期?
豊津町	徳永川ノ上遺跡	I号墳墓群6号墓	方格規矩渦文鏡片	後期終末
	〃	I号墳墓群8号墓	三角縁画像鏡片	後期終末
	〃	III号墳墓群	小形仿製鏡	
	〃	IV号墳墓群19号墓	三角縁盤龍鏡	不明
	〃	2号墳丘墓1号棺	凹帯縁方格規矩鏡片	後期終末
	〃	4号墳丘墓4号棺	「長宜孫子」銘内行花文鏡	後期終末
	平遺跡	箱式石棺墓	き鳳鏡片	後期終末
豊前市	鬼木鉾立遺跡		銅矛(耳部)	
	河原田塔田遺跡	1号墓(土壙墓)	細形銅戈	前期末~中期初頭
	小石原泉遺跡		後漢鏡片	後期終末
	鬼木四反田遺跡		銅鏡	
	〃	祭祀遺構	有茎銅鏃	中期初
	〃	貯蔵穴	銅鉈	
大平村	穴ヶ葉山遺跡	40号墓	内行花文鏡片	後期後葉~古墳初頭
	金居塚遺跡	包含層?	細形銅劍	
	下唐原田代遺跡	環濠	舶載内行花文鏡片	

※出土地が不明な伝世品は除く。

近い状態か又は完成品が当集落に交易品としてもたらされたものと考えられる。一方で、豊津町山ノ神遺跡や徳永川ノ上遺跡G地区の後期の住居跡からは、荒割りされた後まだ研磨されていない石庖丁の未完成品が出土している。このように石器の製作工程と流通の問題は必ずしも画一的ではなく、消費地の意向によっても変化しうるものであったのかもしれない。

その他の道 下稗田遺跡の具の地域性 旧河川地区では製作途中の木製品を保管した土壙が発見されている。この土壙の内部からは木製品とともに前期中葉の壺が出土している。ここに保管されていた木製品は平鋏二連式未製品一点・平鋏未製品二点・箸状

木器一点などであるが、木質を軟化させ、加工を容易にするために水中に貯蔵されていた可能性も指摘されている。下稗田遺跡からは他にも両用鋏・堅杵たてきね・小型臼・椀形木製品・鋏や石斧の柄・案・建築部材など一〇〇点を超える多種の木製品が出土している。未完成品の存在からみても、これらの木製品は一貫して集落内で生産されたものであろう。

京築地域では土器や石器以外にも他地域から搬入された遺物が発見されている。金属製品のうち銅製品については当地域ではまだ鑄型の発見例がなく、銅鏡や武器形銅製品の多くは他地域からの搬入品と考えられる(表2-8)。十双遺跡の後期後葉の第9号居住跡からは板状の銀製品が出土している。これは長さ五・三五センチ、幅一・〇五センチ、厚さ〇・一五センチの大きさで、銀九七・六%と極めて純度の高い製品である。弥生時代の銀製品は国内では非常に稀有なもので、佐賀県大和町惣座遺跡の指輪三点と北海道羅臼町植別川遺跡の飾り金具しかない。当遺跡の銀製品の産地は第13号住居跡から出土した漢式土器と同様に朝鮮半島の楽浪産と考えられている。安武深田遺跡からは分銅形土製品が出土している。前田山遺跡の貯蔵穴からは石製の剣把頭飾はしらしゆくが出土している。これは剣の柄の先端部につける装飾品であるが、その素材が黒色を呈する磁鉄鉱で、隕鉄の可能性があることで注目されている。その生産地は朝鮮半島や大陸に求めることができるであろう。分銅形土製品は中期中葉から後

期中葉にかけて岡山県を中心に山口県などに分布するもので、近隣では北九州市の北方遺跡きたがたやカキ遺跡で出土している。瀬戸内海沿岸地域との交流を示す資料である。

第四節 北部九州の弥生文化

北部九州は稲作農耕が最初に導入された地域であり、言い換えれば列島内で弥生時代が初めて産声を上げた地域である。その後も弥生時代を通じて大陸との交流の窓口となっており、新しい技術や道具がいち早く取り入れられた先進地であった。

本節では弥生時代における北部九州の特徴を、集落や墓地・道具などに焦点を当てながら概観していく。

集落の変遷

稲作農耕が開始された時期は北部九州では縄文時代晩期にさかのぼる。福岡市板付遺跡は御笠川みかさの氾濫原にのびる舌状台地上に住居跡と貯蔵穴からなる集落と墓地が営まれ、水田は集落西側の氾濫原に広がる。縄文時代終末期に開始された集落は、弥生時代前期に入ると南北約一七メートル・東西約八二メートルの卵形の環濠に囲まれ、墓地は環濠の外側に営まれるようになる。水田跡からは人の足跡も発見されている。二丈町曲り田遺跡では水田より三〇メートルほど高い独立丘陵上に、縄文時代晩期の方形堅穴住居跡三〇軒と支石墓一基が発見されている。出土遺物には大陸系磨製石器群や鉄器・紡錘車が